まえがき

讃岐の人物誌を先年来、二冊上梓したが今回、三冊目を執筆した。表題のように功なり名を遂げた人物よりも面白い人物誌として筆を進めてきたことを読み取ってほしい。過去の記述でも神話の人物も入れているし伝説の人物も書いているがそう言う人物を生んだ讃岐の風土も多彩に描こうとしたためであり、讃岐という地の利がそうした多くの人物を育んだものと考えたからである。

古代の文化は生粋の地域文化でなく中国大陸あるいは朝鮮半島からの渡来人の影響であり、秦氏、漢(あや)氏の二大部族の渡来が大きいと思われる。その子孫たちはこうした父祖の縁から羽田氏や幡多氏、畑氏と名乗って定着したと考えられている。讃岐では香川郡に多くの渡来人が来たといわれている。明法博士の多くは讃岐香川郡の出身となっていることもそういうことであり、空海の諡号を高野山の廟に報告したといわれ同行二人思想生みの親である勧賢もこの香川郡の生まれである。

讃岐国は気候温暖な瀬戸内式気候圏で住みやすいために多くの人が住み着き後世、有能な人物を生み出したと考えられる。

世界に誇る平安の知性とされる空海、あるいは天台宗の圓珍をはじめ名僧知識を多く出していることもこういう風土が影響しているに違いない。時代は下って江戸時代の奇才平賀源内、あるいは久米通賢、女流文学者として名を残す井上通女、漢文を読みやすくした後藤芝山、寛政異学の禁の柴野栗山、近代に至っては反骨のジャーナリスト宮武外骨、文壇の大御所といわれた菊池寛、「二十四の瞳」で一世を風靡した壺井栄、吉田茂首相から「曲学阿世」といわれても全面講和論を曲げなかった東京大学総長南原繁、ブギウギで一世を風靡した笠置シヅ子というように硬軟多士才々である。

歴史は人間が作っていくし人間が歴史を作っていく。人間に知性が備わり人物となっていくのである。その文化を生み背負っていった讃岐の人物をしたためたのがこのシリーズである。特にイラストを描いてくれたみやもと・やすこさんは、その人物の風貌、生き方を巧みに描き本書をビビッドにしてくれたことに感謝している。

平成二十一年睦月

瀬戸内海の見える丘で

津森　明